

第5回「泉大津市オリアム随筆賞」

【佳作】

ゾウのTシャツ

福井敦男・京都府

彼女とは商社に勤めていた時に知り合いました。二年後輩にあたる彼女は、明朗快活で社交的、目鼻立ちのはっきりとしたエキゾチックな美人でした。恋のライバルも多かったのですが、必死の思いで告白すると、なんとOKの返事。飛び上がらんばかりに喜んだのを覚えています。

交際を始めて間もなくの頃、彼女は私にアメリカ旅行の土産だと言って贈りものをくれました。それは胸のところ的巨大なゾウと、その前をゆく女性の姿がプリントされたブランド物のTシャツでした。ゾウを従えて歩く美しい女性が彼女自身のように思えて、私はそのTシャツを気に入り、よくデパートに着ていったものでした。

順調に交際を重ねて二年、そろそろ結婚をと考えていた矢先、私の体に異変が起こりました。連日、酷い倦怠感に襲われ、疲れがまったくとれません。たまらず内科を受診して検査してもらいましたが、原因は分かりませんでした。悶々とした気持ちで仕事を続けていたある日、右手が痺れていることに気づき、慌てて整形外科を受診すると、頸椎の圧迫骨折と椎間板ヘルニアが発覚したのです。

私はまったく知らなかったのです。自分の首の骨が折れていたことを――。

実は高二の夏、ふざけてプールに飛び込んで底で頭を打ったことがありました。当時受診したまちの開業医が「異常なし」と診断したため、多少痛みが残っても遣り過してしまいました。それが十一年も後になって牙を剥いたのです。どうにも持ち堪えられなくなり、恐ろしい症状が表に出てきたということです。

「事故から時間が経ち過ぎている。こんな首でよく今までよく頑張ってきたな。こんなに骨と関節の変性（変形）が進んでしまつては手術はできない」という大病院の医師の診断を聞き、頭が真っ白になりました。

手術もできず、会社も辞めることになり、実家に舞い戻りました。病状はさらに悪化の一途を辿り、患部の痛みに加えて、頭痛や吐き気、強烈な倦怠感に襲われると、私はとうとう布団に寝付いてしまいました。彼女を幸せにすることなど到底できないと思ひ、別れを切り出しましたが、そんな状況にあっても、いつかよくなる、と彼女は私を励まし、側を離れようとはしませんでした。しかし、時間が経つうちに、あんなに明るかった彼女の顔から笑顔が次第に消えていきました。寝付いて二年が過ぎた頃、もう一度別れを告げると、彼女は「いぶん長い間泣いたあと静かに部屋から出ていきました。彼女が帰つたあと、私の目にも涙が溢れ、咽び泣きました。彼女が結婚して北陸に行つたと風の便りに聞いたのはそれから二年が過ぎた頃でした。」

来る日も来る日も布団に横になっているしかない私の目の前を歲月だけが虚しく通り過

ぎていきました。紆余曲折の末、寝付いて実に十二年後、ようやく東京の専門病院で手術を受けられました。予後は芳しくなく、回復は遅々として進みませんでした。怪我から時間が経ち過ぎて、大袈裟に言うところの首の骨が粘土のように柔らかくなっていたのです（骨軟化症）。人生が一步も前に進みません。死にたいと思ったこともありました。チタンの突き刺さった首の骨がギシギシ軋んで夜中に悲鳴を上げます。そんな夜は、布団の中で痛みを耐えながら、悔しさと悲しさと虚しさが綱い交ぜなつた涙を零しました。

術後、十年の歳月があつという間に過ぎ去りました。私は今も寝たり起きたりの苦しい療養生活を続けていて、術前、術後を合わせると、実に二十年以上の長きに渡つて布団に横になつてゐることになります。気づけば齢は五十を過ぎ、私の世話をしてきた母も古希をとうに過ぎてしまいました。老いた母には迷惑と心配の掛け通しで申し訳なきが募りまゝす。それでも近頃は、短い時間ならどうか連続して起き上がっていられるまでに回復しました。

自分でも思いがけず筆筒の引き出しを開けていました。そこには、二十年もの間、気持ちに封印するかのよう仕舞われたままになつてゐるゾウのTシャツがありました。

今頃、彼女は どうして いるの だろう。 幸せに暮らして いる だろう か……。

Tシャツを手を取つてまじまじ見てみると、とつくに断ち切つたはずの彼女への想いが込み上げて涙が溢れました。このTシャツを着て、かつて彼女と大阪や京都の街を闊歩したように、布団から抜け出して外の世界へ飛び出したい。もっと元氣になりたい。もっと回復したい。どんな形でもいいから社会復帰を果たしたい、そう強く思いました。

ふと、懐かしい彼女の笑顔が浮かんできました。ゾウが「頑張れ、頑張れ」と私を励ましてくれているように感じます。